

安部公房全作品

1

新潮社

安部公房全作品 1

定価 850円



発行 昭和47年9月20日

3刷 昭和50年6月10日

著者 安部公房 (あべこうほう)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 / 振替東京4-808

電話 業務部 (03)266-5111 / 編集部 (03)266-5411

印刷所 東洋印刷株式会社 製本所 大口製本

© 1972, Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

安部公房全作品Ⅰ 目次

終りし道の標べに 5

牧草 111

異端者の告発 133

名もなき夜のために 159

虚構 205

薄明の彷徨 221

デンドロカカリヤ 243

夢の逃亡 263

啞むすめ 295

安部公房全作品 Ⅰ

終りし道の標べに

《目次》

第一のノート
終りし道の標べに

第二のノート
書かれざる言葉

第三のノート
知られざる神

十三枚の紙に書かれた追録

《亡き友に》

記念碑を建てよう。

何度でも、繰り返し、

故郷の友を殺しつづけるために……。

第一のノート

終りし道の標べに

終った所から始めた旅に、終りは無い。墓の中の誕生のことを語らねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか？……。

霧に包まれた道を歩きながら、疲れ切った心の中で、今や最後の灯影がついに消えて行くのを、あのまがりくねった粘土塀の終る所にしばらくやすめて見た。

粘土塀……霧の中で重い乳色に身をすりよせて、追憶にまぎれ忘れられた崩壊……あの寂寥にはふさわしい無秩序な道の顔……其処からは果てしもない氷雪の原が、何処からともなく去来する視野に、ときおり過去の、あるいは未来の、赤裸々な調律をのせて送りとどける。

さらに私は粘土の壁と門とを見た、と、ただ忘却だけが創りあげうるこの形象を、表現し断言する必要があっただろうか。もう自己を断言することさえ出来なくなったのに。

寒さのために感覚の鈍くなった手を、霧が凍りついてキラキラ光る粘土の面に、そっと押しつけてみた。ぼんやりとした手形が透明な膜に包まれて浮び出る。恐ろしくなってきた。なぜこんなことをしなければならなかったのだろう。なぜ一切がこうも疎遠に親しみにくいのだろう。三カ月という月日は、順応するのに未だ不足だったのだろうか。このよそよそしい大地の瘤。粘土と、高粱と、それに僅かの松材と花崗岩とで組み立てられ、黒煉瓦とすすけた油紙と原色の消えかかった顔料とで包まれ、曠野の中に風雨に曝されながら、まるで生物のようにうずくまっているこの辺境の村落。拒絶の本能、むき出した牙。他所者に対して、蜃気楼のように一步一步身を退けて行くその手口には、確かに侮り難い意志的なものがある。ほころびはじめた私の心。何かしら確証を得ようと軽はずみな心から、凍りついた粘土塀に押した手形は、まるで毛編みのジャケツのほころびに指を突込んだようなものだった。輪郭を消し去ろうと、内部から拡がってきた氷の軍勢は、はや私の心臓を霜

の結晶でおおい始めている。

しかも私は「かく在る」という事ができる。なぜ？
いまましい意識という火の胡桃！

とつぜん耐えがたい悪寒に襲われて、急いで道をもどりがら額に手を当ててみた。三十八度五分はありそうだ。

寒さにもかかわらず腋の下は微かに汗ばんでいる。咳き込んで吐いた痰には赤く血が線状に混っている。久しぶりの気晴らしにでもと、ちょっと出てみたのが意外に障ったらしい。恐らくこの部落は私の逃走に最後のとどめをさすのだろう。氷い逃走……目的のような手段、手段のような目的……正直いって、私にはもう、物事の終りという観念がなくなってしまうらしいのだ。星もみえない暗がりの中で、一切が影であるのか、もしくは一切の影が消失したのかも分らぬままに、ふと背後にしのびよる大きな影を、たとえば故郷からの使者のように予感する事があったとしても……。

それはひっきりょう儂い望みだ。すでに逃走の目的さえ見失ってしまった私に、今さらどんな故郷が残されているというのだろうか。

曲りくねった、しかしせいぜい二、三百米しかない道に、私はすっかり息を切らし一步一步体を支え直さねばならぬほどだった。最後の長い粘土塀を通り越し、黒煉瓦の門をくぐって、中庭に踏み込むとほっとした。だが運の悪いことに、避ける間もなく李清枕の弟の清中に出遇ってしまったのだ。すっかり疲れていたのですぐ部屋に帰ったかったのだが、礼儀正しい清中は恐らく見逃したりはしてくれない。

案のじよう、寒さに焼けて真赤になった顔を、笑いにこわばらせながら、呼び掛けてくる。

「おや、散歩とは珍しい。ちょっと寄っていきなさいよ、熱い茶でも入れるから。なんだか、顔色が良くないねえ。そうそう、ちょうど夕食の仕度が出来たところだ。清枕のところと一緒にって行きなさいよ。今日は竜湖に鴨撃ちに出掛けてね。さあさあ……」

私は断わるつもりでひよいと相手の顔をみた。しかしながいこと忘れていた、黄色い灯火のまわりの団欒にも似た微笑みを見たときに、ふと我知らず彼の誘いを本気にしてしまっていたものだ。そして、ぼんやり、まるで正当な義

務に従いでもしているような氣持で、黙ってそのあとについて行っていた。

しかし、複雑な通路をくぐって、急に大きな明るい李清枕の部屋に入ると、おんどるにけぶった白い鏡に、いきなり蒼ざめた自分の顔が立ちふさがるように映り、言いしれぬ苦痛にふと立ち止ってしまった。この村落の、小さいがしかし稠密な組織が、またしてもこの憐れな逃亡者を喰い止め、押し出そうとしているのだ。ふと頭をめぐらすと、私の異様な素振を見すえている清枕のけわしい視線にぶつかる。

と、恐ろしい疲労が胃の中で焼けるようにうずき、私はもう何も言う必要がなかったし、また何も言いたくなかった。ただ黙って此処を出れば良い。呼びとめる声が無いのいいことに、そそくさと外に出た。

部屋に帰って独りになると、急にぐったり、服をぬぐ間もなくおんどるの上に俯伏せに倒れてしまった。何かにしがみつきたいような疲労の中で、体の方はすでに睡ってしまったのに、意識だけはまだ半ば目覚めているあの不安な状態は、悪酔いにうなされてゐる人間をはたから眺めているような奇妙な感じだった。その歪んだ意識と闘いながら、私はいつの間にやら眠ってしまったらしい。

やや経って、何かの刺戟をうけ、しばらくのあいだ消えかかっていく淡い夢から覚めようともがいている。

幾つもの黒い影にかこまれて、私はどこか見知らぬ町の上を飛んでいた。漆黒に輝く大きな鴉の群になって、いっせいに《青い手、青い手》と奇妙な叫び声を発しながら……と、とつぜん鴉たちが飛び去り、目がさめた。

目を開くと同時に、ドアが閉って、誰かが出て行った。

広い肩巾と、いつも何かを探っているような猫背と、毛皮のついた黒い緞子の上衣とで、すぐに李清枕であることに気がついた。はっとして見ると、胸の鈎はすっかり外れて、内ポケットから手帳が半ば落ちかかっている。例の秘密を探るために、清枕がそこまで積極的な態度に出たのかと、思わず慄然とせざるを得なかった。ぐっしり汗になった体を拭くために、上半身を起すと、たちまち激しく咳き込んだ。口を覆った手のなかで、血が糊のようにねっとりついている。とつぜん何かが込み上げてきた。はじめ私はそれを笑いだと思った。しかし胸を衝いて出たのは限りない嗚咽だった。この十年間、すっかり忘れていた啜り泣きだった。

だが果して私は不幸だったのだろうか。むしろ今でも、自分の幸福を信じ続けているつもりなのだが……。

そうだ、十年前、あの逃走の始まった日、あれ以来というものは一刻たりとも幸福を疑った事などなかったつもりだ。幸福であるべきはずだったのだから、恐らく幸福だったに違いない。

あの日……彼女は言った。

《なぜ、なぜそんな無茶をしなけりやならないの？》

《分らないからさ、これ以上、なぜこんな現実には忠義立てをしなけりやならないのか……》

《憲兵かなにかに聞かれたら？》

《知らないものは、答えようがないだろう。》

《恐いのね？》

《恐いよ。》

《でも、そのほうが、何倍も危険なんじゃない？》

《死ぬ危険よりも、生きる危険を選ぶのは当然じゃないか。》

《死ぬとはかぎらないし、生きられるともかぎらないわ。》

《それでも私は言いつづけた。》

《とにかく僕には分らないんだ。なぜ僕が、予定表に書き込まれたとおりの僕でいつづけなけりやならないのか、どうしても分らない……》

《心残りはないの？》

《あるさ。あるけど、もう我慢がならないんだ。》

その晩は何に心をわずらわされる事もなく、心ゆくまで嘔り泣いた。

泣きおえてから、手紙やノート類といっしょに、彼女の写真も焼き捨てた。赤い火が、くすぶりの中に消えてしまふと、幸福を感じた。故郷を捨てた代償に、せめて幸福くらいにはめぐまれてもいいはずだという確信から、私はその幸福を信じることにした。

そして私は出発したのだ。どんな故郷も、建てるよりも早く風化してしまうにちがいない、荒野へと……。

ふと頭を上げるとあたりはすっかり暗くなっている。ランプを点けよう。枕許からマッチを探り出し、そろそろ土間に這い下りた。しかし、突然ひどいめまいを感じ、あわてておんどろの角により掛るのがせい一杯だった。体中、特に手が、まるで他人のもののように感じられ、額の中心にむりやり何か軟らかいものを押し込まれているような不快さに、今にも息が止りそうである。どうやらくるべきと

ころまできたらしい。私ともう動けなくなったことを知ったら、李兄弟はいったいどんな態度に出るだろうか。

しかし私自身は、この廢疾を、べつだん悲しいとも苦しいとも思わなかった。やり場のない肉体のたるさを、輾転と狭いおんどるの上に置き替える佗しさはさて置いて、やはり幸福であり、見事に故郷に挑戦しつづけたという自尊心だけは、みじんも傷つけられはしなかった。

故郷とは、要するに自分の足で踏みかためられた環境の一角の名称にしか過ぎぬのではあるまいか。それもただ、《かく在る》と言いつづけるために……。

だがふと《かく在る》のを忘れ去って、外の音に耳をすます。

気づかぬうちに吹き始めた風の中から、聞き馴れた物音がする。おんどるに薪を入れている音だ。それから何かを引きずる音がする。それは壊れた焚き口をふさいでいる音だ。

私はほっとして目を閉じた。陳が帰って来たのだ。今にひからびた足音が部屋の外をまわり、入口のところで床をきしませ、土間で向い合った隣の部屋の前で二、三度足踏

みするだろう。それから悲しげな、時には歌うような音をたてて戸がきしむ……。

だが何んて言うことだ。この数秒の間でさえ、郷愁に引き裂かれ破れた心は黙って見過すことが出来なかったのか。気づいてみると、私の視線は、そのドアの向うに陳以外の誰かの影をまざぐっている。私は恐ろしくなってきた。

この無意識的な確信。これは本当だろうか。いったい何を確信したと言うのか。それとも想像を確信したのではなく、それが確信的な想像であったと言うのだろうか。ともかくひとつの言葉がはね返ってくる。それは《敗北》という言葉だ。しかしそれとても、やはり経験から押し出されてきた名前にすぎぬ。丁度われわれの手の長さ、歩速、比重、視野、音波に対する感度等が、判断や予測の前に押し出されるように。いったい何が、何を、いまさら私の内部から押し出そうとしているのだろうか……。

だがその想像も急に破られる。例の足音は、土間のところまでは確かにそのとおりだったのだが、ドアの前でひょいと向きを変えてしまったのだ……。どうやら陳は私の部屋にくるつもりらしい。私は身がまえる。

さっと吹き込んだ外気……。氷漬けになった生命の香り、重々しい体臭……。つづけてひびだらけの低い声……。

私はいかに陳に好意を感じていた。むしろそれが友情の始まりであるのか、それとも敵ともなり得ないほどの距離が作る安心感だったのか、その点は明瞭ではないが、ともかくも、この瞬間陳がきてくれるのを待ち受けていたような気がする。私としてはあの問題を、一刻も早く片付けてしまいたかったし、そうかと言って、李兄弟に直接話す気にもなれなかった。

以前、私は陳のように、故郷との繁りの稀薄な人間をしきりと求めたことがあった。しかしいまでは、それがどんなに儚い瞞着であったかをよく知っている。まさに無意味な二重の瞞着なのだ。第一に、私はまるで無縁な二つの故郷を愚かにも混同していた。だがもしそれが、明瞭に区別されていたとしても、やはり同じく憐れな誤謬に過ぎまい。ちょうどランプ占いに時を費やしたり、信じてもない手相にじっと見入ったりするあの心理と、同じ事ではなからうか。運命線を通りながら、いつか自分をひ弱い線画の中に埋め込んでしまう拙い業。そればかりではない。人間と人間との関係を、心の中で秤に掛けることにもなりかねまい。それは感傷にすぎらうとする惨めな魂を、感情と名づけるほどの過ちにも匹敵するだろう。人間と人間とを渡す橋について考えることは、ただ情念としての認められ

ることなのだ。愛ですら、相手を明確に人間として認める時、それはもはや科学の問題であるはずだ。科学……たぶん神でさえ語りうる言葉……。

しゅつと音がして周囲が急に明るくなった。陳がマッチをすったのだ。

「どうした。寝ているのかい？」
私は目を開けていたのだが、激しい裸の光に邪魔されて、寝ているものと思い込んだのだろう。陳はそれっきり何も言わずに、ランプのほやを持ち上げた。その瞬間、風にマッチが吹き消され、再び部屋は孤独な本性——暗闇——に引き返して行った。陳は舌打ちをして、またマッチをすりなおす。天井から、ぐつとのし掛るように曲った大きな影が、ランプの上につかみ掛る。とまた風が吹いて火が消えた。三度目、今度は用心しながら、ほやの中でマッチをする。

そう言った動作を見ながら、またぞろ故郷への道しるべをのぞいたように思った。そのうんざりするほど常識的な行為から、自分自身に対してもうんざりしてしまふ。しかし、とっさに、私は二つの故郷を見極めていたように思う